

第3回 阿部 希望さん

独自に築かれた“良いタネを農家に提供する役割やしくみ”が、日本の種苗業の強みにもなっていると思います。



阿部希望さん
(宮城大学食産業学群フードマネジメント学類助教)
は、種苗業の歴史研究への扉を開いた

『伝統野菜をつくった人々―「種子屋」の近代史―』（農文協）は、農業史や種苗業、伝統野菜に関心のある人の中で評判になった本である。著者の阿部希望さんは、大学生の頃に伝統野菜に関心を持ち、そこから種苗業の歴史研究に入った。この本は、阿部さんの博士論文が土台となったもので、近代の種苗業史について、初めて明らかにした研究である。実は日本の農業史研究の中でも種苗分野は空白地帯で、阿部さんの仕事にはパイオニア的な意義も大きい。現在、宮城大学で教鞭をとる阿部さんに、種苗業史研究の道のりや思い、これからの種苗業などについてうかがった。

都心で育ち、伝統野菜に関心を持つ

阿部さんが種子に関心を抱いたきっかけは、大学生だった頃。伝統野菜に関心を持ったことから始まる。もともと花や植物が好きだった阿部さんは、筑波大学の生物資源学類（一般的には農学系学部にあたる）に進んだ。ここでは学部の後半に、生物、経済、工学、化学の4コースに分かれる。阿部さんは経済コースに進み、農業史研究室に所属した。

「大学で友人たちと出身地の農業の話題になったとき、都心で育った自分の原風景には『農』がないことを意識せざるを得ませんでした。この出来事をきっかけに、地元の農業のことを知りたいという気持ちが募り、卒業研究に向けて東京の農家のフィールド調査を行うことにし

ました。その際、大竹道茂さん（現江戸東京・伝統野菜研究会代表）と出会い、多くの農家をご紹介いただきました。大竹さんは、江戸時代から続く伝統野菜に注目し、平成元年からその復活に向けて精力的に活動しておられました。農地が少ない東京23区にも、江戸時代から続く伝統野菜を守ってきた農家がいることを、このとき初めて知ったのです」。卒業論文は、東京の伝統野菜を活用した地域活性化の取り組みについてまとめた。その過程で、伝統野菜の栽培に不可欠な固定種の種子とそれを扱ってきた人びと、つまり種苗業者の歴史に関心を抱くようになったという。

「伝統野菜に欠かせない固定種の種子は一度途絶えてしまうと復元ができませんから、その由来や歴史への興



阿部さんが、博士論文を土台に著した「伝統野菜をつくった人々」(農文教)。
種苗業の近代史を扱い、好評を得た



詳しい著書情報はQRコードを check

味をかき立てられました。東京都北区の滝野川が種子屋の発祥地で、種子の一大集散地として栄えていたことも初めて知りました。種子屋について調べていくと、歴史研究としてはほぼ空白地帯だったこともわかりました。これまでの農業史研究では、地主制論や村落論などの近代農村の階層性や社会政策についての研究は多くても、人々が生きるために不可欠な食料を誰が作り、どのように消費者に提供していったのかなどについての実証研究は多くはなく、特に食料生産の根源である「種子」についてはまったく未開拓分野だったのです」。

2007年春、阿部さんは未開の地である種苗業の歴史

を明らかにするべく、100年前の種苗業者の記録資料を求めて、各地の種苗店や郷土資料館を訪ね歩くようになったのだった。

郷土資料館で見つけた膨大な史料

その結果見つけたのが、豊島区立郷土資料館が所蔵していた「榎本泰吉家文書」だった。内容は江戸時代から数百年にわたって種子屋を営んできた榎本留吉商店の史料(種子取引に関する書簡、帳簿、カタログなど)6万点以上である。

この史料には、榎本家の蔵が取り壊されるという連絡を受けた学芸員が急遽現地へ駆けつけ、すでに解体業者によって運び出されていた廃棄寸前の史料を、当主の泰吉さんの承諾を得て資料館に一括寄贈してもらったという経緯がある。これを資料館の学芸員と地域のボランティアが、友の会古文書サークルの有志活動として一緒に整理を進めていたのだ。しかし、整理は全体の3分の2が終わったところで、その先のデータベース化にはまだ手がついていなかった。

そこで阿部さんは、既に整理されていた史料の中から、明治末期から昭和初期におよぶ1万4000点をデータベース化する作業を手伝わせてもらうことで、これらを読み、論文に反映させた。「約1年間、毎週末、つくばから資料館のある池袋まで出かけ、朝から夕方までひたすらパソコンにデータを打ち込んで目録を作成しました。気の遠くなるような作業でしたが、当時の私は新たな知を発掘しているワクワク感の方が大きく、無我夢中で作業していたように思います」。

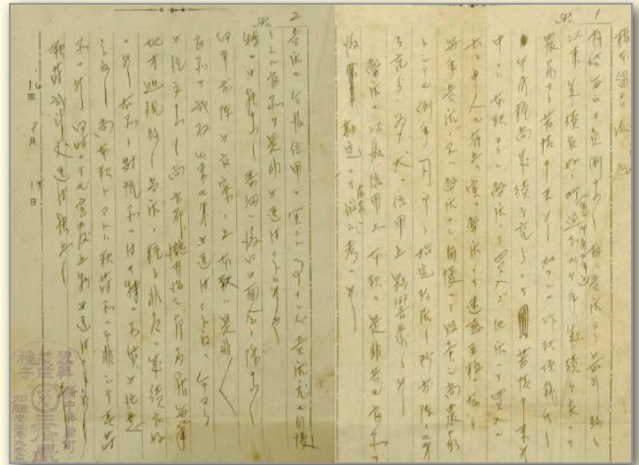
その後、修士論文としてまとめ、博士後期課程に進む。しかし、榎本家の史料を使ってさらに研究を深めようと考えていた矢先、豊島区が外部委託による史料整理事業を開始したため、阿部さんは榎本家の史料を閲覧することができなくなってしまった。

地道に続けた調査活動

「博士後期課程への進学後に榎本家の史料がしばらく閲覧できなくなることになってしまって、正直焦りました。博士論文の研究テーマの変更も考えなければいけない状況でした。しかし、あきらめきれずに、史料の探索



帳簿類（榎本泰吉家文書）豊島区立郷土資料館所蔵・写真提供
東京府下巢鴨村（当時）で百数十年にわたって種子屋を営んできた
「榎本留吉商店」の文書類。
阿部さんが大学院生時代に出会った最初の史料群である。



種子問屋に寄せられた種子小売商からの手紙（榎本泰吉家文書）
豊島区立郷土資料館所蔵
岡山県の種子小売商から榎本留吉商店に発送されたもの。ゴボウの種を
購入したが過去二年、収穫が良くないという苦情が記されている。

を続けたんです」。そして、見つかったのが高橋熙家文書（高橋仁七種苗店・新潟県新潟市）だった。

「種子問屋の榎本家と種子小売商の高橋家、タイプの違う2つの種子屋を比較検討できたことで、『種子屋の機能分化とその連携』という近代の種苗業の重要な特徴を見いだすことができました」。阿部さんは榎本家の史料を閲覧できなくなったピンチを、新たな史料を発掘し、新知見を導出するチャンスに変えたのだった。

高橋熙家文書には、阿部さんが榎本泰吉氏から高橋熙氏（高橋仁七種苗店 代表）を紹介してもらったことで出会った。「泰吉さんが、高橋さんのところで古い史料を見たことがある気がする、とおっしゃっていたのを頼りに訪ねてみると、高橋さんがこれかなあ、と持ってきてくださったのが墨文字で記した古い書類でした。目にした時には、これで種子屋研究が続けられる、といううれしさでいっぱいになりました」。阿部さんは総計490点を越えるこの史料群を一括して大学の研究室に運ばせてもらい、それを整理し、分析した。

歴史研究では、分析の前提となる史料を整理・保存する作業も非常に重要となる。「史料を一点ずつ、中性紙封筒に入れ、表に項目（帳簿、注文ハガキなど）を入れて分類し、年代や内容を記し、整理番号を振ります。それをパソコンに記録してデータベースを作成して、初めて史料の閲覧が可能になります。分析する時間よりも、その前の史料整理の作業の方が、実は大変な労力と時間が

かかっているのです」。¹⁾

古い手書きの「くずし字」を読むことにも苦労があった。「私は史学部出身ではないため、大学院に入るまで古文書を実際に見たことがありませんでした。さらに、江戸時代のものは墨書きで、ある程度型が決まった文が多いですが、明治以降になると鉛筆やペンの文字が入ってきます。墨文字より筆跡に個人の癖が出ますから、それを読み取るむずかしさもありました」。毎日、史料と向き合い、古文書を読むための辞典なども使い、類推しつつ、判読していく。想像力と根気のいる作業である。

明治中後期に都市化が進み、種苗業が発展

種苗業は野菜生産の土台となる重要な産業だ。それにも関わらず、なぜこれまで研究されないままになっていたのだろうか。阿部さんはその理由を、研究者の関心が種子に向いていなかったという側面もある一方で、担い手の多くが民間の種苗店であり、その後も民間企業であったため、経営に関する記録情報が一般に公開される機会がなかったことも大きかったのではないかと見る。

国の農業技術振興も稲作をはじめとする穀類に向けられていた。公的な農業研究機関でも同様で、明治26年（1893）に育種事業を行う国立農事試験場が東京都北区に設立されたが、ここでの試験研究の中心は米、麦、ナタネ、粟、大豆だった。ようやく野菜を対象に研究が始まったのは大正時代に入ってからである。明治以降も



近年は全国で伝統野菜に関心が集まるようになってきた(東京・丸の内で開催されたイベントにおける江戸東京野菜のブース)



野菜の育種、供給などはもっぱら民間が担っていた²⁾。野菜生産は品目数が多いため、全国規模の記録や統計を体系的に把握することも難しく、他の農作物に比べてデータが乏しいという問題もあった。

こうした史資料の制約が多い状況の中で、阿部さんは種苗業の発展史を解明したのだ。詳しくは阿部さんの著書『伝統野菜をつくった人々』(農文教)に譲るが、種苗業には次のような流れがあったことがわかってきた。

江戸時代は農業の指導的立場にある各地の老農などが育種を担い、余ったタネを販売するなど、農家副業の一環として種苗業がはじまった。それが江戸時代のいつ頃に始まったかは定かではないが、明治初期には大都市近郊を中心に全国で1000以上の種子屋があったことが確認できる。

明治中後期に入ると、都市が発展し、人口が増え、野菜需要が高まった。野菜の均質性、生産性が求められる中で、選抜育種を繰り返して形や大きさのそろった固定

種を作る技術も発達した。「この時期は種子屋にとっても、大きな転換期だったと思います」と阿部さんは語る。業者の数が増えただけでなく、分業化が進んだことで種苗業全体が大きく変わった。阿部さんは著書の中でこう書いている。「明治中後期以降の種子需要が増大・多様化する過程で、種子の生産から小売りまでを単独で担う種子屋は例外的となり、種子の生産・流通過程において分業体制が構築された。すなわち、生産面では、問屋による近郊農家への委託採種と、採種管理人による遠隔地の採種管理体制の確立があり、流通を支えた行商人と露天商は店舗を構え、小売商・仲買商、さらには地方種子問屋として本格的に発展していった。」(『伝統野菜をつくった人々』より)。

種子の大量生産、全国規模での大量流通のしくみができた結果、野菜生産農家は地場の品種だけでなく、他の地域の優れた品種や外来種も作ることができるようになるとともに、安定的に種子を入手できることで、商品と

しての野菜づくりに専念できるようになったというわけだ。

博士論文を本にまとめ、反響を得る

博士号を取得した後、阿部さんは日本学術振興会特別研究員PD、学習院大学史料館臨時職員、国立公文書館つくば分館非常勤職員を務めた。この間に結婚し、お子さんも生まれた。

博士論文が書籍になったのは、ちょっとした偶然からである。「農文協（農山漁村文化協会）の販売員の方が、私の指導教官の研究室に訪問販売に来たとき、たまたま机の上にあった私の博士論文に目を止め、タイトルを見て、おもしろいですね、と言ってくださったのがきっかけです。博士号を取得して間もない未熟な私に、単著を書かないかと声をかけてくださったことは、本当に幸運だったと思います」。

本を執筆したのは公文書館に勤務していた期間だった。「伝統野菜が社会的関心を集めていた時期でもあり、研究書としてではなく、広く一般向けの書籍にしてはどうでしょうかという提案があり、博士論文を全面的に書き直しました。平日は公文書館での勤務があるので、土日の休みを返上して執筆しました。それでも当初の刊行予定より大幅に遅れてしまいましたが」。原稿の校正は1年以上にも及んだという。

驚いたことに阿部さんは、この本を自分の研究生活の最終ゴールだと思って書いたそうである。博士号を取得後、大学の研究職をあちこち探したが、農業史という専門の枠は狭き門で、研究職への就職は非常にむずかしいことを痛感したからだ。研究職以外の職を転々とする時期を過ごしていた阿部さんは、「最後の思い出作りとして、今までお世話になった方々への恩返しとして、研究成果を本にまとめよう」と思った。しかし、出版された本は評判となり、2016年度日本農業史学会賞を受賞する。これを機に、NPO法人江戸東京野菜コンシェルジュ協会の講座をはじめ、伝統野菜に関係する一般市民向けの講演依頼も増えた。「本を通じて、自分の研究を多くの人に知ってもらえました」。最後の思い出づくりと思ってまとめた本が、あきらめかけていた研究職への道を開くきっかけとなったわけだ。

現在、阿部さんは宮城大学の食産業学群（宮城大学には看護学群、事業構想学群、食産業学群の三学群がある）で教鞭をとっている。「当然、食に関心のある学生さんが多いのですが、一方でこれからの第一次産業をどう考えるかという話になると急激に関心が薄くなるような印象があります。種子を通して、食べ物の向こう側の世界にも興味を持ってもらう機会を提供できたらと考えています」。

紆余曲折の種子屋研究

振り返れば、阿部さんが種子屋研究を始めてから16年の月日が経とうとしている。その背景には、この本を読んだだけでは分からない、いくつものドラマがあった。

廃棄寸前の榎本泰吉家文書がああ時捨てられていたら…。阿部さんは種子屋の史料と出会う機会を失い、種子屋研究も始まっていなかったかもしれない。榎本家の史料が閲覧できなくなった非常事態にも、阿部さんはあきらめずに新たな史料を探し、地道に史料整理と調査分析を続けた。だからこそ、これまで光が当たることもなく忘れ去られていた種苗業の歴史と重要な役割が初めて明らかになったのだ。そして研究職以外の職に就きながらも、種子屋の研究調査はやめなかった。同じ頃、指導教官のもとに訪れた訪問販売員に阿部さんの研究が目に入り、書籍化が決定した。こうしたいくつもの運と出会いが積み重なって、今があると阿部さんは感じている。

「種子屋の研究調査を始めて間もない頃、榎本徳次郎商店（北区王子）のご当主である暢夫さんに『外見のみからは優劣を判断することが困難な種子を生産・販売する種子屋は、「Seed-man」という紳士の代名詞で呼ばれ、Seed-manは信用を第一とする』というお話をしてくださったことを今でも鮮明に覚えています。私がこれまで研究を続けてこられたのは、調査を通じてお世話になった方々の信用に何とか応えたいという想いがあったからです」。

種子産業全体の近現代史研究に向けて始動

今後めざす方向としては、まず、F1時代以降の種苗業の分析がある。「昔のことを知る人が減っていくことに危機感があります。種苗業の歴史については、私しか研究者がいないので、私が取り組まなければ日本の種苗業



絶版して暫く購入できなかった本が、
オンデマンド（ペーパーバック）により購入が可能となった。

史は見えない歴史のままになってしまうという責務も感じます」。

阿部さんは戦後、F1や海外採種など、新しい動きはあっても、近代に形成された種苗業の“良いタネを農家に提供する役割やしきみ³⁾”は、現代にも引き継がれていったと見る。「種苗会社の数は減っていますが、大手から小売まで異なる役割を持った種子屋の機能分化とその連携体制が今でも残っている。それがグローバル化時代での日本の種苗業の強みにもなっていると思います」。

種子について知りたいことはまだたくさんあるそうだ。「海外の種苗業との関係や比較史にも興味があります。また日本では稲作の研究は充実していますが、稲の種子、つまり種粃の歴史などについてはまだ手薄だという印象もあります。そうだとすると、米と野菜を種子という切り口で比較することもできそうです。つまり、種子産業全体の近現代史を描きたいですね」。

この阿部さんの構想が具体化されるかもしれない。この4月、文部科学省の外郭団体である独立行政法人日本学術振興会が審査・交付を行う「令和5（2023）年度科学研究費助成事業（通称、科研費）」に、阿部さんが研究課題として申請した「日本における種子産業の歴史的展開に関する実証的研究」が採択されたからだ。

「種子屋の近代史を出版以降、結婚・出産等のライフイベントも重なり、なかなか思うように研究ができませ

んでした。今回、科研費に採択されたことで、また本格的に種苗業の歴史研究に取り組む体制が整いました。種苗協会の会員の皆様には、「種子屋の近代史」の続編となる「種子屋の現代史」の調査研究に、ぜひご協力いただけると嬉しいです」。

今後、種苗業界がどのように変わっていくかは予測できない。けれども、歴史を正確に把握することは、この業界に何を残し、何を变えていくかを判断するうえで重要な示唆を与えてくれるはずである。その意味でも、今後の阿部さんの研究の発展に大いに期待したい。また、種苗業界として、種苗業の総合的な歴史の編纂に取り組み、これまでの業界実績を広く社会へ発信するという意味でも、ひたむきに研究活動を続けてきた気鋭の研究者の新たな挑戦を応援していきたいところである。

（取材・文：織田孝一）

■注

- 1) 阿部さんが整理した史料は高橋家の承諾を得て、現在は新潟市北区郷土博物館に保管されている。
- 2) 明治政府は当初、外国（主にアメリカ）産野菜の国内生産をめざして試作事業に着手した。しかし日本の環境に合わずに失敗したため、日本独自の野菜生産を各地の民間事業者任せに政策へと転換した。
- 3) 具体的には、F1品種開発の土台となる固定種の作出、自主審査体制による種子の品質の安定・向上、種子の生産管理、種子の流通・販売体制の四つが継承されたことであった。

●阿部希望（あべ・のぞみ）

1984年栃木県生まれ、東京育ち。筑波大学生物資源学類卒業、同大学院生命環境科学研究科博士後期課程修了。博士（農学）。日本学術振興会特別研究員（PD）および学習院大学史料館臨時職員、国立公文書館つくば分館非常勤職員、立教大学経済学部助教を経て、現在、宮城大学食産業学群フードマネジメント学類助教。これまで日本の農業史研究の中で未開拓であった種苗業の歴史研究で、2010年度日本農業史学会賞（奨励賞）と2016年度日本農業史学会賞（学会賞）を受賞。